藤昌益

常久

東邦出版社

昭和44年12月20日　発行
定価　五二〇円

著者　桜田常久
発行者　藤山真人
発行所　株式会社東邦出版社
東京都千代田区神田神保町二〜二八
電話東京(二六一)五七二五〜七
振替　東京　八五二七五
印刷・太平印刷社　製本・大和工業

© 1969

目次

お馬おん改め　3
めらしの首ねっこ　34
うらつぶの念仏　65
しもやけ狐　91
のぞき目がね　121
すれ違い　157
けかちとのたたかい　207

装幀／山崎外郷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お馬おん改め

――将軍は、いやしい人間である――

百年後、あるいは二百年後に、ひとびとは、おれの考えを理解し、実践してくれるだろう。人間の世のなかは、たえず変化し、動いていくものだから、おれは、その動いていく方向を、誤まりなく見きわめたい。だから、どのような不幸が、おそいかかろうとも、良心にしたがって、まっとうな考えを書きのこしておこう。どのような不運が迫ろうとも、この筆だけは、曲げたくない。

二月すえの寒い夜ふけ、安藤昌益は、かれの命をかけた書物「自然真営道」の第二十四巻「法世物語」の下書に――将軍は、いやしい人間である――と書いたが「いやしい人間」という文字の上に、紙をはって、――将軍は、けものである――と書き改め、筆をおき眼をとじ、冷えきった両手の指さきを、こすりあわした。油のきれた、あんどんが、じいっと泣いて、またたきはじめた。

奥州のはて、八戸の二月のすえの夜ふけの寒さには、筆の穂先きは凍り、硯の水が、じゃりじ

やり鳴った。

昌益がいま「将軍」と書いたのは、ただ九代将軍家重個人を指しているのではない。家重が、延享二年（一七四五年）十一月二日、父、吉宗のあとをおそって、将軍職をついだとき、三十を越したばかりの男ざかりだったが、生まれつきの弱い体質と、十五、六歳ごろからの房事過度とが、たたって、まるで七十歳台の老人のように老いさらばえていた。肉体的には、筋骨がこわばり、顔も手足も、しわにおおわれ、皮ふの色つやはなく、指先はふるえ、眼はどんよりくもって、いつも眼やにをためていた。生まれながらの精薄児だった家重は、記憶力も判断力も人なみでなく、このごろは、とくに気が短くなっていて、側近のものや、お女中衆を困らせていた。昌益は、将軍と書きはしたが、もちろんこの家重個人をさしているのではない。制度としての将軍職そのものが、いまの世の中の、組みたての大きな間違いの根元である、という事実から、論旨をすすめたかったのである。

久保田（秋田市）から、追われるようにして、昌益は、この八戸に逃げてきたのだが、この八戸藩も、昌益にとっては、安住の地ではなかった。この藩の支配下にある三戸、九戸、志和三郡八十三カ村の百姓の総人口は、五九、四六六人であって、その上座に、一、五九七人の士が、あぐらをかき、士は、身分制護持のための職業軍人の役を、はたしていた。しかも一、五九七人の士の上に、わずか五歳の八戸藩主、南部信興が、ちょこんと座って、臭い、おねしょをひっかけていた。さらに悪いことには、八戸藩は、南部藩（盛岡）の分家であるから、本家の監視の下に小さくなっていなければならない。そうした二五六の大小名の首っ玉をしめつけているのが、精薄児あがりの九代将軍家重である。この不合理な組みたてを維持するために、自然に逆行する、

さまざまな苛酷な法律、伝統、血縁関係、身分関係などを、人為的に作りあげた世の中を、昌益は「法世」と名づけていた。「法世物語」のわずか一行の句にこだわって、思案しつくしたすえ、「いやしい人間」を「けもの」と書き改めてはみたが、それでもかれの考えは、まだ十分にはいい現わされていなかった。自分の考えを、なまのままで、後世の人に伝える方法はないものだろうか。昌益は、こごえた指先に、息を吹きかけ、硯池の氷をわって、堅くなった筆のほをかみ、

——家康は、けものであった——

と書き改めた。そうだ、ここから書き始めなければならなかったのだ。この不合理きわまる現在の制度を批判するためには、まず、家康から語り始めなければならない、と気づいた。だが、東照宮大権現を「けもの」と格付することは、命と交換しなければならない、恐ろしい一句だった。これが「すっぱ」（スパイ）に嗅ぎつけられようものなら、この神聖ぼうとくにたいする、権力者の報復が、どのように残虐なものか、それは昌益も知りすぎていた。だから、おれは、一さいの感情を殺して、とくに冷静にならなければならないのだ。おれには、うそは書けない。いま、おれが、すこしでも、うそを書いたとすれば、おれは、家康以下の「けもの」に落ちなければならない。相手は、絶対的な権力者だが、おれは、完全な無権力者だ。それでも、おれは、うそだけは書かないことにしよう。みみず切りの百姓の下に、えた、非人などという不合理な身分的序列をつくった張本人を許してはならない。昌益の知っている限りでは、きょうまで、この封建制を批判した人は、十七、八年前に死んだ荻生徂徠と、いまなお生き残っている太宰春台の二人きりであるが、かれらは現象の表っつらを軽くなでまわしただけで、封建制の病理と治療法に触れることを、極度に恐れていた。それは恐ろしい患部だが、だれかが一どは切開してみなけれ

ばならない患部だった。病理と治療法を示さないで、どうして下積みの百姓衆を救いだせるというのだろう。「生きていれば、娑婆ふさぎ、死ねば、墓ふさぎ」といわれている百姓衆を！

昌益は、ふたたび筆をおいて、考えこんだ。二月すえの、しびれるような寒さが、せなかから、首すじから、膝がしらから、おそいかかってくる。妻およの、かすかな、平和な寝息が、ふすまをへだてて隣室から、きこえてくるほかは、もの音は、まったく死に絶え、自分のからだの中をかけめぐる血の流れが、ききとれるほど静かだった。

かたく凍りついた雪が、こぼれるはずはないのだが、庭木の枝から落ちた雪が、築地の崖をころげおちるらしく、同時に雪ぐつで、いてついた地面を踏みしめる音がきこえてきた。昌益は草稿の「家康うんぬん」の一行を、すばやく、水にしめして、破りとり、口にいれた。雪を踏みしめる足音は、しだいに遠ざかって、しばらくしてから、かすかな、押しころしたような歌声がきこえてきた。

……おばこ居もせで
　隣のじじっこなんど
　茶っこ飲んでいる……

それは、昌益が故郷の秋田で、よくきいた歌だった。ふすまを隔てた隣室で、およがねがえりをうった。

「すっぱのえんこ（犬）かと思ったど」

ふすま越しにおよが話しかけてきた。「若えが、えれえ人だの。こげな夜中でも見まわりにきてくれるでな。ありがてえこったなす」

およも昌益と一しょになってから、おそろしく眼ざとくなっていた。
確竜堂良中、安藤昌益先生の一ばん末端の弟子と自称する北田九之丞は、その兄の忠之丞とともに、夜となく、ひるとなく、昌益の身を守ってくれていた。
翌日は、吹雪だったが、あけ六つ（六時）すこし前、昌益の門の戸をたたくものがあった。
およが、使いのものに、用向きをきくと、湊町のいわし釜場の幼児が、ひきつけで、苦しんでいるから、至急来ていただきたい、とのことである。昌益は、すばやく仕度をおわると、玄関で、わらぐつをはきながら話しかけた。
「医者は官許の殺し屋だな。また一人殺すのか、いやなこった」
およは、主人の、さむざむと、やせた背を見て、いとしさが、こみあげてきた。貧しい小さな命であろうと、是が非でも救いたいのが、主人の願いなのだが、うちの人は、いまの医術の限界を知りすぎていらっしゃる。医術に限界のあることは、当然としても、助かるものをも死なせるのは、むしろ金の問題ではなかろうか。暮しのための一文二文に苦労する人に、医者代の一両二両の工面は、むつかしい。貧しい人が、医者さまを呼ぶ決心を、やっとのことで決めたときには、いつも生命には、手遅れなのだ。うちの人としても、自分で薬箱をさげて、この糠塚の宅から湊町まで、吹雪を、ま正面にうけて歩くことは、容易なことではない。吹雪に消されていく主人の後姿を玄関に両手をついて見送りながら、およは、
「なんぼか、ええお方だべし」
と泣いた。町の人が、貧しい主人のことを、陰では、かぶら医者、あわび医者とさげすんでいるが、およは、むしろ、この言葉に、かすかな誇りを感じていた。主人ほど、お礼をむさぼらぬ

人は、南部にも、津軽にも、秋田にも、いや、日本中にも、あるまい。百姓や漁師が、蕪一たば、鮑三つを、お礼に、といって、さげてくると、

「なおったか、なおったか。よかった、よかった」

と、手をたたいて、喜んで、お受けとりなさる……。

昌益は、鼻っつらに吹きつける吹雪をさけようとして、前こごみになり、全身が汗ばむまでに急いだが、患家に駆けつけたとき、もはや幼児の命を救う、てだてはなかった。かわいい女の児が、すでに眼の黒玉をつりあげ、

「おとうよ、おかあよ」

と泣きつづけて死んでいった。

昨夜おそくまで仕事をつづけた疲れのあとだったので、一人の幼児を空しく死なせた悔恨が、かれの心に、一そう重苦しく、のしかかっていた。今日のおれには、ものごとを、深くつきつめてゆく気力がすりきれた。おれは「法世物語」を書きつづけることをよして、第二十三巻の浄書に、とりかかろう。机の前に端座して、字画の正しい、太い字で浄書をつづけた。それは決して巧みな字とは、いえなかったが、まじめな字だった。

予定の浄書が、おわって、ばんげの膳についたとき、九之丞が貧乏徳利をさげ、油あげの竹の皮包みを、ふところに、あたためて、訪ねてきた。昌益が、酒をたしなまないので、同志の人は、かれの前で盃を手にすることを、遠慮したが、九之丞だけは、特別扱いだった。

「有益なお話をきいて利口になり、こちらもお酒をのんで、楽しくなる。こげな仕合わせなことが、この世に、またとありますまい」と笑っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「油あげは、焼いて、おろしで食うと、こたえられねえでがんすぞ。さあ、ご夫婦お二人ぶん」
およにかんしてもらった酒を、もっきり茶碗でやりながら、長い腕をのばして、昌益の膳のうえの、沢庵をつまんだ。
「先生、すこしはうまいもん食って、養生してけれや」
「おれは、これでも、けっこう、うまいと思って、食ってるのだが」
秋田を追いだされた昌益、南部からのがれてきた北田兄弟、かれらは、この土地では、他国者として取り扱われているが、そのことが、かえってかれらを一そう親密にさせていた。
兄、忠之丞は、馬の飼育に特殊の技能をもっている点が、八戸藩で買われて、馬改めの吟味役に採用されたが、弟は、侍稼せぎに、あいそをつかし、乾鮑、ほしか、乾かすべの仲買などをし、二人とも、どうにか、その日のくらしに困らなかった。九之丞は、すこし酒がまわると、陽気になり、自分で考えだした話を、じっさいの話として、語ってきかせる癖があった。
「……この糠塚の奥に、腹ペコの狼がいてな、人間を二人かみ殺したとよ。あんちゃ狼は、その肉を、ずっぽり食ったが、おんじ狼は、食うと同時に、げろげろっと吐きだしたでや。あんちゃが、どうしただや、ときくと、おんじは、臭くて食えたもんじゃねえ、と返事しただや。あんちゃが、食うたのは、百姓、つまり真人間。おんじの食ったのは……」
「学者か、ぼんず（坊主）だったというのだべ。おれにあてこすった皮肉か」
「んだ。正にそのとおり。みんな臭えよ、学者先生は。ただし、うちの先生は別でがんすぞ。ところで、働くものだけが、食ってもよい。働かないで、むさぼり食うものは、天道を盗むものじゃ、と先生は、おっしゃるが、先生ご自身は、働く連中のうちかね。いまおれの眼のまえで、ば

んげを食ってらしたが」
「そこだよ。その点が一ばん、はずかしい。医術は、天下公許の殺し屋だと、けさも、およと話したところだ。世の中の組立ての底まで見きわめた人、自然の動きの真の姿を見つくした人、その上で、人の命を貴ぶ医術をおさめた人、このような人だけが、医者になってよい、とわしは考えている。この昌益なんどは、天道を盗む殺し屋にすぎん」
昌益は、そういって、ふたたび顔をあげようとはしなかった。
「先生、ようっく、腹にこたえやした。……ところで、中の五の日の集会を、忘れんでけろな」
「仙確（神山の号）にばかり厄介を、かけるのも考えもんだど。世間の口もあるし、それじゃ、かえって、すっぱに、かぎつけられるだや」
「なあに、すっぱの一ぴきや二ひき、九之丞が、すっぽりと、やっつけますでや。先生に、めいわく、かけね」
茶をのんでいた昌益は、急に、きびしい顔になって、茶碗を下においた。
「九之丞。すっぱにしろ、人を殺しては、怨みを重ねる。仕事がやりにくくなれば逃げるだぞ。逃げても仕事を、つづけるのだ。おれは、何とかして、オランダに渡りたい、と思っている。清国、インド、シャム国でもよい」
「先生、そいつは禁句、禁句。渡海はきつい、ご法度だべし。はりつけか、獄門だべ」
「わるかった。禁句だったな。な、堅く約束すべ。渡海のことは、二度というまい。人を殺すなどと、二度と口にするな」
「ようがんす」

九之丞の帰ったあとで、昌益は、

「明日は、十五日だったな。どっこいしょ、と」

とたちあがって、隣室のふすまをあけた。

毎月十五日に催される昌益らの会合ほど、きびしく、しかも、なごやかなものはなかった。それは、日本全国に、二十六名しかいない、死を誓いあった同志の集まりだったから。

会合は、ひる八つ（十四時）に、はじまり、くれ六つ（十八時）の、寺々の鐘の音とともに、おわった。会衆のまえに、あらかじめ、大きな湯呑が、ならべてあって、その中みは、だいたいは番茶であるが、酒、どぶろくのはいったものも、少しはあった。ところが、酒、どぶろくの湯呑には、なみなみとつがれたもの、三分盛りのものもあって、これらの中みが、めいめいの座る位置を示していた。

また、万一、踏みこまれた場合の用心に、みな「陶淵明詩抄」を、わざと膝の上にひろげていた。

延享三年（一七四六年）二月十五日定刻に、はじめられた集会には、八戸在住の神山仙確、島森慈風（伊兵衛）、福田定幸、中邑忠平、北田兄弟など九名のほかに、南部藩の高橋大和守（栄沢）が八戸に出張中を利用し、えぞ松前の葛原堅衛が出府の帰途を利用して、出席していた。かれらは、時候や久濶のあいさつなど、よけいな口は、一こともきかず、ただなつかしそうに、ほおえみかわし、目礼をかわすのみだった。

元来、昌益自身が「吾に師なく、弟子なし」と、書きのこしているが、この集まりは、昌益の二百万字以上の大著述「自然真営道」を筆写したものの会合であるから、しぜん、昌益が中心と

なることは、やむをえないとしても、かれは、決して講義らしいもの、説教らしいものを、しようとはしなかった。

席についた昌益を見ると、中肉中背の、平凡な町医者であって、この日の亭主の仙確や南部の高橋大和守の方が、はるかに堂々としていた。顔にも、姿にも、ものごしにも、とりたてて記すほどの特長はなく、弟子の仙確が「美ならず、醜ならず」と記述しているとおり、どこでも出合う、一見、百姓らしく見える四十がらみの、風采のあがらぬ男であって、しいて、特長らしいものを探しだすとすれば、やや、猫背であることと、その眼の光とであった。それは、ほそい、やや切れながの眼で、平生は「慈眼」という言葉どおり、おだやかな、やさしい光をたたえ、なかば眠っているように見えるが、時として、人の腹の底に冷たい風を吹きこむような、冷たく、鋭く輝くことがあった。

この日の会合の主題は、前回にきめられた「仁」を中心とするものであったから、かれらは、まず討論によって「仁」の定義をきめ「仁とは、恵みをたれること」と定義し、さらにすすんで、「めぐみ」と「たれる」という二つの言葉も規定した。「めぐみ」とは、愛、慈悲という抽象的、観念的な意味も含むが、それは主として「ものを与える」という行為を究極の目的とするものであり、「たれる」とは、「上から下のものへ」つまり身分の上下関係、治者と被治者との関係を想定するものと解釈が一定した。このように、前もって、中心となる言葉の定義をきめてかかる態度は、かれらの討論の混乱、誤解、無用の論争を避けるための大せつな出発点だった。

この日の討論を要約すると、

「治者は、仁をもって人民にのぞむ、といわれているが……」

「とんでもない。治者は一粒一銭も生産しないではないか」
「かれらは、大衆の生産を盗んで（搾取して）下のものに恵む以外の方法はないから……」
「大衆の生産を盗む手段として、法律、制度、慣習をつくり、職業的戦士としての侍の武力で、無理を強いるために背後から、大衆に威圧を加え、また鋸挽き、火あぶり、はりつけ、獄門、うち首、水牢、流罪などで、不断に脅迫をつづけている。はりつけ、獄門に処せらるべきは、盗みを働く治者であって、盗まれた大衆ではない……」
「だから、大衆が、上からの仁を期待することによって、卑屈にされ、屈従をしいられるようなこの世の組み立てを……」
「生産者こそ、与えて、しかも搾取することがないから、まことの仁の実践者である。治者は、逆に、仁をうける立場にいる……」
　このような討論が、仙確、定幸、大和守その他の人びとによって、すすめられたが、もっとも驚くべきことは、たとえ、極めて素朴な形にしろ、かれらの間では、弁証法が用いられていたことである。たとえば「仁」を論ずるにあたって、その反対概念の「不仁」を設定して、結論において「仁と不仁とは、二にして一である」ことを、みとめていた。
　このような会合での昌益の役割は、討論の結果を、できるだけ簡単な言葉に要約することだった。かれは、つぎのようにいって、同意を求めるため、一同の顔を見わたした。列席者一同は、かるく、うなずいた。
「治者が仁をおこなう、というのは搾取のための、まやかしであり、仁を日常実践しているのは、生産大衆である。だが、大衆は、上からの仁と威迫とに幻惑されて、屈従を強いられ、堕落させ

られ、世直しを遅らせている……これで、ようがしょうな」
昌益は、もう一ど念をおすため、列席者を見まわした。九之丞だけが、首を横に振って、笑ってみせた。
つまり、この日の討論によって、かれらは、協調主義、温情主義の、まやかしであることを、はっきり見やぶり、封建君主に奉仕する儒教の、最大弱点の一つをついたのだった。
寺々のくれ六つの鐘が鳴りだすと、かれらは、一人ずつ、間をおいて、席をたち、仙確の家の表玄関から、裏口から、また脇門から、音もなく、声もなく、やみに吸いこまれていった。
昌益は、鷹匠小路の神山家の脇門をでてから、大工町を右におれ、光竜寺の土塀にそって、南宗寺の脇にでた。ここは、ほとんど人通りのない、さびしい坂道だった。左手に、南宗寺の垣根にかこまれた裸木の木立があり、右手は、高さ一間たらずの崖で、その崖下に、小さな、無人の板小屋が三棟、それぞれ離れて立っていた。昌益の十間ばかり前を歩いていた忠之丞が、急に、たちどまって、腰をかがめ、まん中の板小屋をのぞいた。小屋の戸は、倒れていた。ここは妻神（さいのかみ）番屋、天狗沢方面から木炭を運んできて、臨時におさめておく小屋であるから、入口の戸が、開けっぱなしになっていることはなかった。忠之丞は、雪の崖を、すばやく滑りおりると、倒れた戸をたてかけ、それを両手で堅くおさえながら、どなった。
「九の字。お宅までお見送りしるだど。すぐひっかえしてけれ、この小屋さ」
九之丞は、昌益の、はるかうしろから、護衛してきていた。
九之丞が、急いで引き返してきたとき、兄は、小屋の中の男と、板戸一枚を中にはさんで、烈しく、もみあっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com